



「私たちのことをわかって欲しい」
 ーろう話学校生徒の主張ー

まずオー
 プニングに
 は、県立ろ
 う話学校高
 等部の生徒
 による構成
 劇の発表で
 す。毎日の
 学校生活の
 中で感じて
 いる疑問や

要求が織り交ぜられた劇や、「私たち
 の生活しやすい社会にして下さい」等
 の「主張」を生き生きと発表する生徒
 の姿に、「願いが込められていて大変
 良かった」、「難聴者にも共通する主張
 共に手をつないで実現したい」と、参
 加者の共感を得ました。

太鼓の心と響きに大きな感動
 続いて、地元の栗東町を中心に結成
 されている和太鼓集団「雷太鼓」の公
 演では、太鼓の響きの振動と、照明効
 果を駆使した観て楽しむ太鼓が披露さ

21世紀に向けて

聴覚障害者福祉の展望

第5回聴覚障害者の社会的自立を考えるセミナーを開催

去る11月25日、栗東芸術文化会館さきらで開催された、第5回のセ
 ナー（主催：社会福祉法人滋賀県聴覚障害者福祉協会）には、県内から
 300人を超える関係者が集い、21世紀に向けた聴覚障害者福祉の展望や課
 題などを学び合いました。

滋賀県立
聴覚障害者センター
 だより
 第19号

発行日／平成12年12月25日
 発行所／草津市大路2丁目11-33
 TEL 077-561-6111
 FAX 077-565-6101
 E-mail: ww100051@mail.normanet.ne.jp
 http://www.normanet.ne.jp/~ww100051/



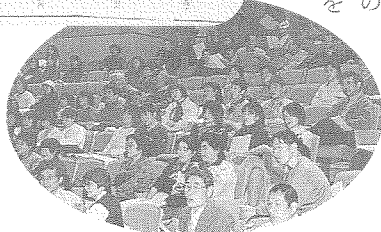
れ、聴き手
 （観る者）と
 打ち手（演者）
 が一つになり、
 感動を分かち
 合う感動的な
 公演になりました。
 「太鼓
 の響きの感動
 を忘れない」
 「勇壮、闊達
 で感動した」
 と多くの参加
 者に太鼓の心を伝える感動的な場面で
 した。

大いに語る／21世紀の聴覚障害者福祉
 午後からは、21世紀に向けた聴覚障
 害者福祉の展望をテーマにシンポジウ
 ムが行われました。コーディネーター
 に三塚武男氏（同志社大学名誉教授）、
 シンポジストには、行政関係者を中心
 に、三友敬太氏（社会福祉医療事業団
 福祉部貸付部長）、谷口日出夫氏（県
 障害福祉課長）、亀吉摩利子氏（大津
 市障害福祉課主幹）と、石野富志三郎
 氏（当法人事務局長）が、それぞれの
 立場から聴覚障害者の福祉の現状と今
 後の展望について発言、フロアーから
 の質問にも答えました。

国の社会福祉や障害者福祉の施策が
 大きく変わろうとしている中、今後に
 向けた課題では、「社会参加の機会を
 阻む要因の解消と、参加できる人とそ
 うでない人の格差をどう解決してい

のか。全員参加の社会づくりに聴覚障
 害者運動の果たす役割は大きい」（三
 友氏）、「これからは個別処遇の理念と
 市町村を中心とした身近な地域でのサー
 ビス提供が重要で、福祉サービスを社
 会サービスに高めていくことが必要」
 （谷口氏）、「願いの実現のためには、
 行政をまき込み共に作り上げていく姿
 勢が常に大切」（亀吉氏）、「誰もが安
 心して働き、楽しく暮らせる社会を創
 るため、福祉の谷間を無くすことがス
 タートである」（石野氏）などが語ら
 れました。

最後に、コーディネーターの三塚氏
 からは、「聴覚障害者へのコミュニケー
 ション保障は、国と行政の責任が強く
 求められること、身近な市町村に要求
 や願いなど声を届けていくこと、聴覚
 障害者団体や関係者の力の共同をさら
 に発展させていくことが大切」とまと
 められ、参加者の
 大きな拍手で幕を
 閉じました。



聴覚障害者のくらしを守るために

湖西生活支援センターとの連携から

センターが開所してから5年が過ぎましたが、地域との関わりはまだまだ十分にできていないと言えません。しかし、今年4月に入ってから、センター職員が湖西線にゆられ、1時間半かけて湖西地域を訪れることが何度ありました。

それは、湖西地域に住む通訳者からの相談からはじまりました。湖西地域は高島郡の5町1村で、人口は約5万5千人。聴覚障害者は180人ぐらいです。平成8年に高島郡の生活支援センターができ、聴覚障害者に対する支援もすでに実施されていました。そのなかで、

やはり手話通訳が必要ということで、早速相談業務担当者として手話通訳者が支援センターに向かい担当者として話をし、

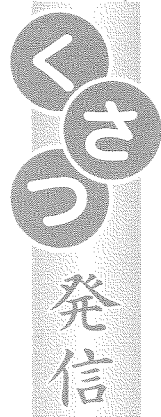
これからのケア会議等にも当センターの相談業務担当者も出席し、共に支援していくこととなりました。聴覚障害者のなかには、十分な教育保障や生活体験が持たされなかったため、自己の健康が壊されたり、要求が潜在化されたままになってしまふ人はたくさんいます。

そこで、同じ聴覚障害の相談業務者が関わることによって手話という共通の言葉で情報を提供し、共に考え、本人の要求を整理していくことができます。

手話通訳の派遣事業が始まってから約20年になりますが、今まで湖西地域からの通訳依頼は数件しかありませんでした。また、通訳者の数も事業が始まった当時から同じで増やすことができませんでした。しかし、今回の関わりをきっかけに、ろうあ者からの通訳依頼が始まったり、当センター主催の通訳者養成講座に湖西地域からの受講生があったりとして、今後は聴覚障害者や手話を学ぶ人の要求が出てくることでしょう。さらに、湖西生活支援センターとしても聴覚障害者関連事業に積極的に取り組もうとされています。

現在は、湖西地域の他に湖北・東近江・大津市・甲賀郡で生活支援事業が実施されています。聴覚障害者のピアカウンセラーがおかれているところもあります。具体的には、食品添加物・農薬を使ったものや加工食品などでなく、食糧の自給率を高め地元でとれた旬の食材を選んで自分(家)で調理したものを、何でも、ゆっくりよく(20回以上)噛んで食べているか。相手やまわりの人たちと、タテマエの話ではなく、くらしに根ざしたホンネでお互いに心の通い合う話し合いをしているかどうかです。

いまこそ、健康問題を中心にすえ、くらしの全体像を丸ごと科学的にとらえて、共通の要求・課題を明らかにし、それを表現する取り組みをすすめていくことが大切になっています。



社会福祉法人

滋賀県聴覚障害者福祉協会

理事長 三塚 武男

21世紀は、平和で健康なくらしができる時代にしたいです。このことは、みずからの労働によって本人と家族のくらしを維持しなければならぬ人たちにとって、共通の、もっとも基本的な願い。要求ではないでしょうか。現実には、くらしの面での困りごとや不安について調査をすると、もっとも多いのが「健康のこと」です。そし

図書のご案内

福祉動向と手話通訳の
あり方を学ぶ
手話通訳士協会ブックレット4
『障害者のケアマネジメントと手話通訳』
(発行)日本手話通訳士協会 八〇〇円

今年6月に社会福祉事業法等の法律が見直され、社会福祉や障害者福祉のあり方が大きく動いています。介護保険制度の中では「ケアマネジメント」がクローズアップされましたが、障害者に対しての介護等のサービス提供のあり方として、障害者のケアマネジメントが注目されています。本書は今年1月、通訳士協会の研修会の講演録をまとめたもので、「障害者のケアマネジメントと手話通訳士」(奥野英子氏)、「聴覚障害者運動とケアマネジメント」(清田廣氏)と2部構成になっており資料も豊富です。国の福祉施策の動向と手話通訳のあり方を学ぶ絶好の図書です。購入ご希望の方は、当センターにお問い合わせ下さい。

要約筆記の充実を

—個人派遣の急増、パソコン要約筆記の検証を—

今年度、初心者向けを除き、登録者のために三講座を開きました。パソコン要約筆記実践、ノートテイク、手書きOHP実践講座です。文字で伝える方法には大きくは3種類あり、それぞれに学ぶべき強化ポイントが異なっていると思います。日頃から難聴者の感想や意見を念頭に置き、また要約筆記者から寄せられる派遣実施報告書を通してのご意見、疑問点に答えられるよう指導内容に盛り込み実施してきました。そのような思い入れをどのくらいの方々に感じ取っていただけただろうかというのが開催側が常に抱いている思いです。

難聴者・中途失聴者同士の会議を結ぶ場面から発展してきた要約筆記も、難聴者個人を対象とした情報保障の場への派遣が急増し、健聴者の中にあっても、難聴者が遅れをとらない参加保障ができるだけの工夫と実践力が要約筆記者に求められてきています。

また、要約筆記設置に対する強い要望がある反面、新設の立派なホール等ではOHP要約筆記の設置スペースが全くないなどの物理的理由からパソコン要約筆記が活躍するケースが増えてきています。

パソコン要約筆記では、より情報量は増えるというものの高速入力や操作技術にとらわれがちとなり健聴者から

の賞賛はいただいても、聞こえない立場を十分に理解できていないために起こる文章構成上、欠かせない部分の欠落も見受けられます。これらの課題を解決していきけるように登録者全員の受講が進められるよう努力しつつ、来年度の養成につとめていきたいと考えています。



「手話指導者の育成」

手話指導の集団・統一性への転換を

—実践学習を重視—

手話指導者養成講座

厚生省から通達された「手話奉仕員養成事業」並びに「手話通訳者養成事業」が実施されて、2年目を迎えています。手話奉仕員養成事業については、昨年度は、県では当センター、市では大津市と守山市での実施でしたが、今年度は、さらに八日市市・野洲町も本事業を実施されています。未開催市等でも、来年度の事業予算要望に取り組み等具体的な動きがあります。

この手話奉仕員養成講座(入門課程・基礎課程)は、全国統一のカリキュラムで構成された新しい内容で実施され、手話通訳者養成までの流れが整備されてきていますが、一方で、手話指導を担う講師の絶対数の不足が、当県のみならず全国的な課題となっています。

当センターでは、講師養成を目的とした手話指導者養成講座を「初めて手話指導者を目指す方」と「経験者」の対象者に対して毎年実施しています。今回は、学習内容をさらに充実したものに努めるべく「初めて手話指導者を目指す方」対象講座に、実践課程を新



たに設け、現場見学学習(講座見学)の実践的な学習内容を取り入れました。手話指導方法も「個々・自己流」から「集団・統一性」への転換期を迎えています。机上の学習だけでなく、手話通訳者養成と同様に実践的な学習の位置付けを導入した新しい試みです。

会場は「手話奉仕員養成講座入門課程」をはじめ他に、当センターに依頼される「啓発手話講座」の会場においても、主催者や手話指導者(聴覚障害者)の格別なご理解・ご協力を頂く事ができました。受講生の方々は、意欲的に学習に取り組んでおられます。

これからも、講師養成に反映できるような講座内容を引き続き検討していきます。

ビデオ制作 今年一年を振り返る!

今年CS障害者専用放送が本格化し、当センターとしても、忙しい一年となりました。しかし、その番組づくりに何回か協力したことにより、今までにない経験もでき、いろいろな意味で勉強になりました。

たとえば、前号にも書きましたが、全国ろうあ者大会では、生中継の緊張を味わいました。また、十二月に放送されたいちばん新しい番組「それいけ! くいしんぼ」(各地の聴覚障害者

がよく行くお店、おいしい有名なお店などを紹介)では、今までに制作したことのない内容の番組だったので、いくつかの失敗もあり、取材の方法(撮り方や照明、音など)や機器の準備など、今後の制作に向けていろいろな意味で勉強にもなりました。

その他にも、字幕挿入や、取材協力など様々な形で関わっています。

今後、CS障害者専用放送も放送日を増やしていくと聞いています。これ

らの経験を生かし、これからもこの専用放送に対して協力をしていきたいと思っています。また、当センターのビデオ制作もレベルアップしていきたいと考えています。

それから今年、新たな試みとして、センター開所五周年記念セミナーにおいて、パソコン要約筆記と連携して、話し手のカメラ映像、手話通訳、文字通訳を同時にスクリーンに映し出すことで、聴覚障害の方に情報保障を行いました。

このように今年、様々な新しいことにチャレンジした年でありました。来年は、さらに磨きをかけ取り組んで行きたいと思えます。応援よろしく!

日曜教室事業のご案内

● 2月3日(土)午後1時30分〜3時30分
県立聴覚障害者センター

「体を使ってリフレッシュ」
—運動の楽しさと効果を実感しよう—
講師 弘部 重信

(草津健康福祉センター・理学療法士)

● 3月4日(日)午前12時〜午後3時

彦根市文化プラザグラウンドホール
「医療相談会」
—自分の健康を確認しよう—
(耳の日福祉大会と並行)



◎年末年始 休所日のお知らせ

20世紀も余すところ数日余りとなり、本当の意味での世紀末の毎日で、新しい21世紀がすぐそこまで一歩いっぽ近づいてきている今日この頃です。

現世紀を振り返り反省のうえに立って、新世紀へ夢と期待を心の中に抱いている人が私達を含め多いのではないのでしょうか。

昨年、コンピュター2000年問題で社会全体が不安のなかでの年末、年始になりましたが、今年、新しい21世紀の始まりの年ということで全てが新鮮な気持ちで希望に満ちた新年を迎えることが出来るのではないのでしょうか

本年も、センターの年末、

年始の期間は、例年のとおり休所日となります。

なお、ビデオの貸し出しについては、次のとおりとなりますのでお間違いないようお願いいたします。

◎休所期間

年末12月29日(金)

年始1月3日(水)まで

(12月28日までと1月4日からは、平常とおり業務を行っています。)

但し、12月28日は午後6時まで

◎休所期間のビデオの貸し出し

12月28日以前1週間の内に借りられる方は返却が1月4日となり、貸し期間が倍となります。

あわせて、ビデオの本数も3本から6本まで貸出しが可能ですので、

ぜひご利用いただけますようお願いいたします。

センターだより

今までそう気に留めることもなかったのだが、子供を持つようになってから「おもちゃ」についていろいろなことを思うようになった。おもちゃひとつをとっても時代を感じる。例えば、私の子どもの頃のおもちゃの電話は、黒電話くらいの大きさで、ダイヤルの下に4つくらいのボタンがあり、ボタンを押すとそれぞれ「今日は一緒に遊びましょう」とか、「今日はパパとお出かけよ」とか返事をしてくれる。今の子どものおもちゃはほんとにコンパクトな携帯電話。ボタンを

おすと「びびびび」と電子音が鳴ったり、メロディーが鳴ったりする。1歳の子どもでもそのおもちゃが電話だとわかり「もしもし」らしき様子を示す。しかし20年前の子どもにそれを渡して電話だと認識するだろうか? 多くを知らない子どもは正直というか、意外な反応を示してくれるので面白い。20世紀も残すところ数日。21世紀のおもちゃはどのように変化しているのでしょうか。今世紀最後の(?) 記念すべきセンターだよりでした。

(M・K)